

筆者の文章を評価する説明文の授業(2)

—第6学年「外来語と日本文化」の実践を通して—

谷 栄 次

1. はじめに

説明文の授業を実践するにあたり、何を重視すべきなのだろうか。森田信義氏は、「説明的文章教材を読む究極の目的は、読者である児童・生徒を、論理的にものごとを認識できる存在として育成することである」¹⁾とし、文章の背後の筆者を意識して、筆者が文章を生み出す上で用いた事柄や論理、表現を評価する読みを提案している。田近洵一氏は、説明的文章を一つの情報源とし、「情報の受容は、情報の収集・整理による課題追究と文章分析による情報及び情報源の検証の2つのはたらきの上に成立する」²⁾としている。

この両氏に共通することは、文章の内容理解だけに止まらない、「論理を評価・検証すること」を重視している点にある。そこで、本稿は「外来語と日本文化」を教材として、児童が何を根拠にどう評価していくのかという点に絞り、考察していくことにした。

2. 教材文「外来語と日本文化」(光村図書6年下)について

本教材は、児童が生活の中で多く目にする外来語を扱った説明文教材である。筆者は、外国の言葉を借りることの背景には、いろいろと文化の問題がからまっており、そういうことに気づくきっかけとして文章を書いたと述べている。³⁾この説明文の論理の特徴は大きく次の3点にまとめられる。

a. 読み手の内面に働きかけるような課題提示にするために、具体的な言葉の例(「カード」「カルタ」「カルテ」の3つの言葉)を挙げ、比較する工夫をしている。

b. 読み手にとって課題解決の筋道を分かりやすくするために、視点(外来語がいつ、どのようにして日本語の中に入ってきたか)を明確にし、時代の流れにそって説明を進めている。

c. 読み手に筆者の思い・考えを明確に伝えるために、課題解決におけるまとめと全体のまとめを分け、簡潔に結論を述べている。

お こ す	課題提示 課題に目を向けるための例(第①②③段落) ↓ 3つの言葉「カード」「カルタ」「カルテ」の比較 課題提示(第④⑤段落) もともとは字を記す厚手の紙を指す同じ言葉だった どうしてこんなことになったのであろうか?
	と く
ま と め	↓ 筆者の思い・考え(第⑩段落) 外来語は、その文化の交流の現れであるといえよう

3. 研究仮説の設定と単元構成

(1) 研究仮説の設定

上記に述べた論理の特徴を踏まえて、次のような研究仮説を設定した。

説明の進め方の特徴について、視点を明確にしてとらえ、自分の意見や疑問の根拠を明らかにしながら話し合いをする場を設定する。そうすれば、児童は、教材に即して、筆者の工夫の効果や問題点に気づき、文章の評価をすることができるであろう。

(2) 単元のねらいと展開

文章の構成をとらえて『外来語と日本文化』(全9時間)

単元のねらい

- 3つの言葉を提示した意図や説明の進め方の工夫について理解することができるようにする。
- 筆者の工夫に対して根拠を明確にして自分の考えをもち、意見交流をすることができるようにする。

第一次 読みの構えをつくる(3時間)

- 生活の中の外来語に目を向け、関心をもつ。(教材文への読みの喚起①)
- 題名読みをし、自分の思いをもつ。(教材文への読みの喚起②)
- 全文を通読し、音読の練習をする。(教材文への抵抗感の排除)
- 気づきの書き込みをもとに、学習計画を立てる。(切り込み口の設定)

第二次 筆者の説明している内容と工夫について読む(3時間)

- 「カード」「カルタ」「カルテ」の3つの言葉を例に出した理由について読み取り、筆者の意図を探る。
- 3つの言葉が別々のちがう言葉のようになってしまった背景について読み取り、説明の進め方の工夫について考える。
- 文章全体から筆者の言いたいことを考え、文章の構造に目を向ける。

第三次 筆者の文章について評価する(3時間)

- 筆者の説明の進め方や述べ方について視点をしぼり、根拠を明確にした意見をもつ。
- 意見交流を図り、筆者の文章について評価する話し合いをする。
- これまでの学習を整理し、ふりかえる。

4. 授業の実際

ここでは、(1)評価の視点の決め方、(2)児童の評価の中身、(3)評価する話し合いの3点に焦点をあて、実践を述べていく。

(1) 評価の視点をどのように決めたか

文章を評価するということは、「なぜこのように書いたのか」を考え、読み手が納得できるかどうかを判断することである。そのためには、まず、何が、どのように書かれてあるのかを正確に読み取らなければならない。そこで、読み取るための切り込み口として学習課題を立てた。学習課題を立てるために、児童の第一次感想が大変重要になる。

右の表は、児童の感想を整理し、まとめたものである。前頁の項2と照らし合わせてみると、初読の段階で、論理の特徴に気づいている児童がいることが分かる。

- a に関するもの(感想1・2・5)
- b に関するもの(感想3・10・11)
- c に関するもの(感想15・16・17・18)

子どもたちの第一次感想

【形式段落①～⑤まで】

- 1 まず①から④で例を出してから、⑤で途中に問いかけの文が出てくる。(3名)
- 2 前ぶれなしに日常的なカード・カルタ・カルテの3つの言葉を出し、似ている点とちがう点をそれぞれ説明しているところがよい。(13名)
- 3 投げかけの文のある⑤段落で答えも述べてある。
- 4 「ところが」という言葉を使って、今までの予想がひっくり返っておもしろい。
- 5 なぜ説明するために3つの言葉を例に出したのか。

【形式段落⑥～⑩まで】

- 6 昔いろんな国との交流があったことが分かる。(4名)
- 7 外来語の具体的で身近なものの例が挙げてある。表が効果的である。(6名)
- 8 「ワクチン」「デッサン」などもっと分かりやすい例にした方がよい。
- 9 その外来語の意味を調べたのかという疑問がある。
- 10 どうしてこの言葉がこの形が入ってきたかが説明してあり、分かりやすい。
- 11 時代をさかのぼって時代ごとに分けて、そこから現代へとくわしく説明している。社会で習ったことが書いてある。5年生には難しい。(4名)
- 12 「ちがない」という言葉で筆者の予想も書いてあることが分かる。
- 13 分かりにくいところを「つまり」という言葉を使ってまとめている。
- 14 ⑨と⑩は似たようなことが書いてあるのでまとめればよいのでは？

【形式段落⑪】

- 15 まとめが長くなって分かりやすい。筆者の思いと例を分けていてよい。(3名)
- 16 日本文化のことは、最後にまとめて書いてあるので分かりやすい。
- 17 題名とあっていないのでは？日本文化についてあまりふれていない。
- 18 最後は少し難しい。最初に出した疑問とまとめの内容がちがっている。

【文章全体で】

- 19 外来語を使う裏にある外国との交わりという部分に目を付けていて気づかせてくれるのでよい。
- 20 一つ一つ解決して次の話題に入る感じがして分かりやすい。
- 21 一行空きのところで区切りがあって分かりやすい。
- 22 いらぬことを除いてもっと分かりやすくしてほしい。
- 23 「である」「がある」など最後が言い切りの形で終わっている。
- 24 渡辺さんは、外来語のことが好きで研究していると思う。

本教材の特徴を踏まえて、学習課題と評価の視点を次のように決めた。

評価の視点①②⑤は、第二次の精読の段階での読み取りと関連させて、第三次の第一時で教師が提示することで視点として定めた。②は、感想3の「答えも述べてある」という気づきから、答えなのかを話し合った結果、「予告の一文」ということになった。

③④は、形式段落⑥～⑨の精読の段階で、「読んでいておかしいと思うところは？」と投げかけ、解決されずに残ったものを視点として定めた。

学習場面	学習課題	評価の視点
形式段落①～⑤	問いかけの一文にいくまでに筆者はどのように書いたのか、その工夫を読み取ろう。	① 3つの言葉の提示は効果的だったか。 ② ⑤段落の予告の一文は、あった方がよいのか。
形式段落⑥～⑨	時代ごとに説明してあることをまとめ、良い点や問題点を話し合おう。	③ 「どれも意味がせまくなり」と⑧段落の「広いまま使われている」というカードの説明は矛盾していないか。 ④ 「ご飯をライスとよぶようなことはふつうには起こらない」と書いてあるが、どう思うか。
形式段落⑩	筆者の考えを知り、文章全体の構成をまとめよう。	⑤ 短いのはよいが筆者の思いは伝わるか。

(2) 視点によって、児童はどのような評価をしたか

視点が明確になったら、自分なりの評価をもつことが大切になってくる。そのために、第二次までに学習してきたことを生かして、考えを整理するために書く場を設定した。児童の評価とその理由を具体的にまとめると次のようになる。(？は新たな疑問)

視点	評価	主な理由
①	効果がある (37名)	<ul style="list-style-type: none"> 身近な言葉でみんなよく知っているから比べやすい 具体的な一例が示してあるので、実感がわきやすい わざわざ考えたことがないことを考える良さがある 課題提示にすんなりつながっていく
	あまり効果がない (2名)	<ul style="list-style-type: none"> 課題提示までが長くなってしまふ ？別の言葉でもよいのではないか ？3つの言葉を決めて書いたのか、内容が決めて3つの言葉を探したのか
②	あった方がよい (31名)	<ul style="list-style-type: none"> 次の見通しがもてて読みやすい、読みたくなる 課題と解決の区切りをはっきりさせることができる 読み手にヒントや基準を示すことになる 筆者が自分で何を書くかはっきりさせることができる すぐ歴史のことになると変で、つながりにくい
	なくてもよい (8名)	<ul style="list-style-type: none"> この一文を抜いて読んでも意味は分かる 書いてあることで、逆に楽しみがなくなる
③	矛盾している (20名)	<ul style="list-style-type: none"> 「どれも」と書いてあるのでカードだけ広いままというのはおかしい、分かりづらい、あいまいである
	矛盾していない (19名)	<ul style="list-style-type: none"> イギリス、アメリカは例外としてとらえる カードも意味がせまくなっていることにはちがいない 意味がせまくなる割合の問題である 入ってきたときの意味をそのまま使っている 交わりのちがいが反映しているのだからこれでよい

4	ふつうには起こらない (14人)	<ul style="list-style-type: none"> ・わざわざ外来語に言い換えることはしない ・日常の会話の中では使い慣れた言葉を使うのがふつう ・日本語を大切にしてほしいという筆者の願いがふくまれているのではないか
	ふつうに起こっている (25人)	<ul style="list-style-type: none"> ・ふでばこをペンケースなどの例はたくさんある ・カメラ、オレンジなど身の回りに外来語があふれているから例外にならない ・筆者の思いこみが強すぎる
5	このままでよい (23名)	<ul style="list-style-type: none"> ・筆者の一番言いたいことが伝わってくるのでよい ・①～⑨とつなげて読めば、筆者の思いは伝わってくる ・⑨段落に問いかけの答えになる部分は書いてあるから⑩段落は筆者の思いだけでよいからよく分かる
	もっと工夫を (16名)	<ul style="list-style-type: none"> ・本当に心と暮らしを豊かにするのか疑問が残る ・文化の交流の現れであるからどうなのか、その先がもっとほしい。自分たちへのメッセージなど。

(3) 自分の評価をもとにどのような話し合いが行われたか

話し合いの焦点化を図り考えの違いを明確にするために、最初に相反する考えを意図的に提示するように働きかける。その後、一人ひとりがどちらの立場なのかをはっきりさせた上で発言するようにした。また、なぜそう判断したのかという理由を必ず述べるようにすることで、ものの見方や考え方が広がっていくことも期待できる。

ここでは、評価の視点 4 についての話し合いの様子を示すことにする。

(T:教師 C a～d:ふつうに起こる C 1～3:起こらない)

<p>T:「どれも意味がせまくなり」の矛盾について話し合います。まずC 1さんとCAさん意見を言ってください。</p> <p>C 1:ぼくは、確かに筆者の言うとおりでと思います。理由は、言い慣れた言葉をわざわざ言い換えて別の言葉(外来語)で言う必要はないからです。</p> <p>Ca:わたしは、ふつうに起こっていると思います。例えば「かみどめ」を「ピン」と言っているし、ご飯だけに限ることではないと思います。筆者の思いこみではないかと思います。</p> <p>T:さあ、二人の意見がちがっていますね。みんなはどう思いますか。</p> <p>C b:ふつうに起こると思います。カレーライスと使ったり、飲み物もミルクティーというふうにふだんでも使っているからです。</p> <p>C 2:カレーライスというのは、カレーライスで一つの言葉で、新しくカレーライスが入ってきたときに入ってきた言葉だからおかしくはない。だからふつうには起こらないと思います。</p> <p>C 3:例えば、そこに猫がいたとして、その猫に向かってキャットと呼びかける人なんていないと思います。だからふつうには起こらないと思います。</p> <p>C c:ここで、筆者が言っているのは、ご飯という昔から日本にあるものをライスと呼ぶことの例であって、カメラやみんなの言っているものはもともとは日本にあったものではないから、ふつうは起こらないでいいと思います。</p> <p>C 4:ふつうには起こらないというのは、筆者がそうであってほしいという、つまり日本文化は日本らしく外来語にたよらない文化を作ってほしいと思っている意見ではないかと思います。</p> <p>C d:昔から使い慣れた言葉と外来語をその時と場合によって、幅広く使い分ける能力が人間にはあると思う。だからふつうには起こらないというのは少し変だと思います。</p>
--

5. 考察

今回の実践において、児童が筆者の文章を対象化して評価しようとするとき、その根拠は主に次の4つに分類できる。

●使われてある一つの言葉から考えて判断する

①の3つの言葉を身近であるとしたり、③の「どれも」という言葉に根拠を求めたりしているものがこれにあたる。

●文の関係や段落の関係に目を向けて判断する

②の予告の一文があった方がよいという根拠は、その前後の文の関係や段落の関係に目をつけたものになっている。⑤についても同様に⑨段落との関係から根拠を導き出している。

●文脈にそって自分の生活を背景にしたり、想像力を働かせたりして判断する

④の話し合いの記録を見ても分かるように、自分たちの生活を背景に外来語をとらえ、筆者の文章の是非を述べている。さらに、C dの意見のように言葉が入ってくることに對する独自の読みがまで発展している。文章をとらえるときに、児童の生活感のようなものが判断に影響してくる。

●筆者の立場に自分が立って判断する

①の「わざわざ考えたことがないことを考える」という根拠は、筆者の3つの言葉を提示した意図でもある。②の「筆者が自分で何を書くかはっきりさせる」という根拠も、書き手の立場に立ったものである。文章から筆者の考えや意図を推察することは、より豊かに文章を読み取ることに繋がっていく。

また、児童の姿から本校のサブテーマである「かかわり」に焦点を当ててふりかえると次のように整理できる。

○筆者の文章を評価することにより、一つ一つの言葉に対して深くとらえようとする姿が見られた。(言葉とのかかわり)

○自分の評価をもとに話し合うことを通して、筆者の言いたいことをより多面的にとらえることができた。(もの・こととのかかわり)

○自分の立場を明確にし、その根拠をつけて発言することで、話し合いの中でからみ合う姿が見られた。(もの・こととのかかわり、人とのかかわり)

○友だちの意見を聞きながら、自分の考えを見つめ直し、さらに考えようとする姿が見られた。(もの・こととのかかわり、自分自身とのかかわり)

6. おわりに

国語科としての教科の特性を考えたとき、様々な対象とかかわる言葉の力をつけていくことが重要になる。児童が真剣に言葉と向き合うことがなければ、そうした力は養うことはできない。向き合う言葉というのは、筆者の言葉であったり、自分の中からわき出た言葉であったりする。筆者の文章を評価する活動は、内容や説明の進め方を理解することと、それらに対する自分の思いを発信していくことが、絶えず双方向で行われる活動とも言える。今回の実践をふりかえて、評価の視点が羅列的になってしまった点が課題として残った。さらに深い教材研究をすることによって、評価の視点を構造的にとらえ直す必要がある。

【引用文献】

- 1) 森田信義, 「説明的文章教育の目標と内容―何を、なぜ教えるのか―」, 溪水社, 1998, pp. 11-15.
- 2) 田近洵一編, 「国語科の新視点2 説明文の授業」, 国土社, 1996, pp. 13-14.
- 3) 「学習指導書6年下希望 筆者の言葉」, 光村図書, 2000, pp. 200-201.